P2-054

3歳児健診における眼科検査方法を変えよう

鈴木 武敏
鈴木眼科吉小路

【目的】
1)最近、幼児の測定も可能な携帯型自動屈折計が、K社とW社の2社から発売された。そこで、健診での採用の際の参考にすべく、測定の容易さと精度を比較した。2)さらに、近方視力測定の絵視標の1つである「STじゃんけんカード(以下JC)」(はんだや)による検査の併用の有用性も報告する。

【方法】
1)連続した5日間に当院を受診して眼鏡処方を希望した48人(7歳から74歳の男女、平均24.2歳±18歳)に対し、従来の片眼の自動屈折計に加えて、K、W両社の装置で測定し、レチノスコープで確認した最終処方値と比較した。2)保育園の常駐看護師が測定したJCの結果と使用しての印象を聴取した。

【結果】
1)K社に比較してW社の装置は精度が高く、調節の加入も少なく、検査可能率ではK社が50%に対し、W社は97.9%であった。2)JCはランドルト環が不可能な2歳児でも検査可能率が高く、弱視と強い関連がある強度遠視の発見に有用であった。遊び感覚で行えることから、幼児や発達障害の子どもでも近方視力測定が容易であった。

【考案】
3歳児健診における眼科領域は、子どもの見え方に関する保護者への問診と、印刷物に付属したランドルト環での家庭での視力チェックで終わっている市町村が多い。しかし、この方法では就学時健診まで見逃される弱視の子どもが少なくない。演者らの住む奥州市では、通常の問診に加えてレチノスコープによる屈折検査を視能訓練士が行い、3歳児の弱視の早期発見早期治療に役立っている。しかし、レチノスコープを使える検査員がいなければ屈折検査は実施不能である。一方、眼位のスクリーニングも出来る携帯型自動屈折計は専門家でなくても、測定可能である。各市町村単位で常備して、3歳児健診のみならず就学時健診、学校健診などでも屈折検査を実施することを奨めたい。また、JCは小児の視力検査として、遠方視力よりも重要な近方視力検査が2歳位から可能で、説明や練習無しで迅速に出来ることから、非常に有効な検査である。

【まとめ】
小児の視機能異常の早期発見・早期治療のために、屈折度を調べることは有用であり、携帯型自動屈折計と近方視力不良を見つけるJCの採用が奨められる。これまでの3歳児健診の眼科検査方法を変える時期に来ていることは間違いがない。

P2-055

小学生の身体能力向上へのアプローチ

和智 正哉[1]、常住 真生[1]、平岩 幹男[2]、秋山 千枝子[3]
[1]ハルスポーツプロダクション株式会社、
[2]ラビット発達臨床研究所、
[3]あきやま子どもクリニック

【目的】
スポーツテストの結果が全国平均を下回る生徒達が多く、その生徒たちの身体能力の向上をめざし、ある運動を継続的に行うことで、運動能力の向上をはかる。

【方法】
東京都公立小学校に通っている4年生、5年生、6年生の生徒たちの体力テストの中で行う握力テストを実施。その計測値が2～3か月後にどの程度向上するかを計測する。行う運動は、スポンジ状の器具や、シリコンゴム状のリングを使用し3～4種目の運動を行う。A：ニョイボウ(スポンジ状の50cm程度のスティック)の両端を持ち、クランク上に曲げて、それを自転車のペダルように回転させる。前まわし、後ろ回しと各20回程度おこなう。B：楽体リング(シリコンゴムのリング)の両端を持ち左右均等に引っ張りながら、両腕を腰の前あたりから頭上へ上げ下げする(10回)。C：楽体リングに両手を入れ手のひらを上に向ける。脇をしめて腕を固定し、その状態から胸を開き、同時に肩甲骨を後方にとじっるような動きを繰り返す(15回)。D：楽体リングに両手を入れて左右に引っ張り、そのテンションを維持。維持したまま顔は正面を向き上半身だけ左右に捻る。全体で約3分程度の運動を一日1回～2回行う。

【効果】
ほとんどの生徒の握力の数値が向上する(80%以上)。またさらに生徒たちの立ち姿勢、及びバランスも向上した。

【考察】
実施した子供たちの感想として、やっていて気持ちがいいし、簡単なので毎日継続しやすいという意見が得られた。また先生方も簡単な運動で、毎日のホームルームの時に行えることから、生徒達への習慣になると嬉しい評価が得られた。さらに、先生方のコメントとして、楽体リングは腕にしておけるので、休み時間や、座りっぱなしの授業の後などに各自でも実施しやすいことから、生徒各々が率先して姿勢改善、バランス力や身体能力の向上がいつでもできると期待している。

Presented by Medical*Online